慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史学家としての田中萃一郎
Sub Title	
Author	佐藤, 正幸(Sato, Masayuki)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	1990
Jtitle	近代日本研究 Vol.7, (1990.) ,p.63- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾における知的伝統
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19900000-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史学家としての田中萃一郎

佐藤正幸

一

一九一八（大正七）年夏、田中萃一郎[1]は大陸に遊び、財政総長辞職後、天津のイタリア租界に引退中の梁啓超を訪ねた。共に四十五才。互いに歴史家としての技量を認めあっていた二人は[2]、ちょうどこの時期、東アジア文化圏の中での「近代歴史学」のあり方を模索し、それぞれの歴史学の構想を史学研究法という形で纒めていた時期であった。この時、梁啓超は田中に、「三年を期して完成の見込みで中國歴史起稿中である」と語っている[3]。これは後に『中國歴史研究法』（商務印書館、一九二二年）として出版された。一方田中は、大学での「史學研究法」の講義としてその歴史学の構想を展開し、その講義ノートも、ほぼ完成の域に達していた。

しかし、この二人の史学研究法は、伝統的中国史学理論の位置づけという、基本的なところで、対照的であった。

梁啓超の『中國歴史研究法』は、後年、彼の名著としてもてはやされたもので、近代史学の立場から書かれた

史学概論として、中国では初めてのものであり、旧史学から近代史学への転機を画した書物として、現在に至るまで読み継がれている。『中國歴史研究法』に見られる梁啓超の基本的立場はヨーロッパの近代史学理論、中でもドイツの史学理論を骨格に中国史で肉付けしたもので、近代中国にふさわしい新鮮な歴史学を創造することにあった。しかし、梁啓超の鋭敏で自信に満ちた論断の展開はその切れ味が良ければ良いほど、切口が鋭ければ鋭いほど、そこに一抹の不安が残る。第二章「過去之中國史學界」を別とすれば、そこには、下敷としたヨーロッパ近代史学理論に対して批判的なところが殆ど無いのである。別な表現をすれば、「伝統的中国史学」をヨーロッパ近代史学を映す鏡として捉えていなかったことである。つまり、当時新たな学問体系の樹立を迫られていた梁啓超の目指していたのは、ヨーロッパの近代史学を座標とした中国史の再検討、中国史学の再構成であり、そこに彼は、中国における近代史学の成立契機を見ていた、と言っても過言ではないであろう。(4)

一方、田中萃一郎は、梁啓超とは別な近代史学への道を模索していた。若い頃から中国史学理論・史学史に強い関心と深い学識を有していた田中は、慶應義塾在学中に出会ったL・リースの教えと、(5)その後二年間のヨーロッパ留学とから得た西洋史学理論の知識をもとに、両者の批判的総合の上に近代史学を構想し、それを「史學研究法」講義として展開していた。田中は、伝統的中国史学理論を「過去のもの」、すなわち単なる知識として頭の隅に置くのではなく、「生きたもの」として捉えている。歴史認識という世界地図の上で、ヨーロッパと中国の双方に等距離に足を置いた田中の脳裏には、この上により普遍性を持った近代史学が築かれるべきだ、という見通しがあったようである。

しかしながら、この田中の構想した「歴史学とは何か」は、広く世に問われることなく、講義のままで、聴講者の記憶の中に埋もれる事になってしまった。一九二三(大正十二)年八月の彼の突然の死と、その直後の関東大

震災による混乱の為、田中自身の講義ノートが紛失してしまったからである。

ところが、一九七二（昭和四七）年十一月、三田史学会が開催した「逝去五十年記念田中萃一郎博士資料展」に、遺族より「史學研究法」講義ノートが出展された。(6)

田中萃一郎は、東洋史家、或は政治学者として既に著名で、没後、岩波文庫に入った『ドーソン蒙古史』全二冊（昭和十一・十三年）と『東邦近世史』全三冊（昭和十四・十六・十八年）の書名と共に、田中を憶えている人も多いと思われるが、本稿では、彼がその生涯を通じて変わらぬ学問的情熱を注いだ史学理論・史学史研究を、この講義ノートを中心に紹介し、彼の構想した「歴史学とは何か」を検討してみたいと思う。

表題に掲げた「歴史学家」とは、歴史のメタ・サイエンス、つまり、歴史哲学、歴史認識論、史学理論、史学史、歴史教育等の研究者を指す言葉で、現在中国で使われている用語である。(7) 日本語には、これに相当する用語が無いため、借用した。ヨーロッパにおいては、これに相当する言葉として Historiologus (8) という用語がある。

(1) 田中萃一郎は、明治六年静岡県田方郡函南村に生まれ、慶應義塾幼稚舎を経て、同二十五年大学部文学科を卒業、同三十二年より母校で歴史を講じ、同三十八年英独に留学、帰国後文学科政治科で史学研究法、東洋史、政治史、政治学等を講じた。大正十二年八月ヘルダー『歴史哲学』上巻の翻訳・校正を終え、新潟県瀬波に遊んだが、同地で突如病のため死去した。田中の著訳書・論文全三百八十六編の目録は、『田中萃一郎史學論文集』（三田史學会、昭和七年）に掲載されている。尚、同論文集は、彼の主要論文二十五編を収めたものである。

田中に関する研究としては、松本信廣「史学者としての田中萃一郎先生」『史學』第四十五巻第四号（昭和四十八年）、拙稿「脱亜論と歴史研究」『史學』第四十八巻第一号（昭和五十二年）がある。

田中の追悼記事は、『實業』第三巻第三号（大正十二年九月）、『三田評論』（大正十二年九月、同十二月）にあり、福田徳三、小泉信三、幸田成友らが、田中の学問・人物を語っている。

(2) 田中萃一郎は「書評・中國歴史研究法」『史學』第一巻第三号（大正十一年）一二四ページで、「……中華民國の政界は再び梁氏の奮起を促さねばならぬ機会もあろうが要するに氏の長所は文筆と弁論とに在って存するのである……」と学者としての梁啓超を高く評価し、一方梁啓超は「東籍月旦」『飲氷室全集』（文化図書公司、民国五八年）三四八－三四九ページで、田中萃一郎の『東邦近世史』の中国語訳の

出版に際して、其の書評で、「東洋之斷代史、捨是書更無他本、……其搜羅事實而連貫之、能發明東西民族權力消長之趨勢、蓋東洋史中最佳本也。」と述べている。

(3) 前掲書評、一二四ページ。

(4) このような西洋文化への強い傾斜は、当時の中国の歴史文化 (Geschichtskultur) 全体についていえる。胡昌智 "Dialektik der Verwestlichung. Zur Krise der chinesischen Identität in der neueren Geschichtskultur Chinas" (第十七回国際歴史学会議史学史部門報告、一九九〇年) 参照。

(5) 『東邦近世史』上下二巻(丸善、明治三十三・三十五年)、自序参照。

(6) 詳細は、パンフレット「逝去五十年記念田中萃一郎博士資料展」(三田史学会、昭和四十七年) 参照。

(7) 例えば、張舜徽『中国歴史要籍介紹』(武漢、一九五五年)、一八八ページ参照。

(8) 詳しくは拙稿『HISTORIOLOGY—『昔語り』から『歴史認識論』へ—」『史學』第五八巻第三・四号 (平成元年)、一-二二ページ参照。

二

明治初年以降、わが国において歴史学について論じたものは数多くあるが、そのほとんどが西洋史学方法論の紹介であった。しかしそれらは、歴史学の原理論を論じたという意味での歴史研究方法論ではなく、むしろ如何に史実考証を行うかといった技法論に終始している。従ってそこでの中心課題は、西洋式技法を如何に日本史研究に応用するかということであった。これらの中で、坪井九馬三の『史學研究法』は、ドイツ流の史学方法論を良く咀嚼して説得的に展開したものであり、(1) このような方向は、内田銀蔵に至って日本史家の血肉と化したといえよう。(2) しかし、坪井をはじめ多くの歴史家の関心のあり方の違いであろうが、西洋近代史学に対する批判的側面、つまり批判的摂取ということになると、殆どそのような視点はみられない。西洋化の渦中に身をおいた者であればある程、西洋史学という「万能眼鏡」で何でも見てしまって、肉眼そのものの働きを忘れてしまうようで

ある。

批判的にということは空想の産物ではありえない。現実には少なくとも手がかりとしてそれと同種のものの存在を前提していなければ行えない。田中は一九〇〇（明治三十三）年、二十七才のときの論文「劉知幾の歴史研究法」の緒言で次のように語る。

> 茲に一科の學問あれば必ずや其研究法あり、殊に其科學の性質研究をして困難ならしむるに從ひ研究法の議論益々其盛を加へ學問の種類によりては其研究法のみを論ぜる著書さえ少からず。歴史の如き實に其一にして此種の著書英文のものゝみにても其數二十種を下らず獨文のものにはドロイゼンの簡明なるベルンハイムの周密なる等斯學に從事するものゝ參考として缺くべからざるものあり。故に余は歴史を繙きて東西兩洋諸國民盛衰興亡の跡を探るの傍更に東西兩洋に於て如何なる方法を以て歴史の研究を行ひしか其沿革を究めんと欲するの志を抱けり。而して西洋に於ては彼が如く研究法に關する著述多しと雖も東洋に於ては劉知幾の史通王鳴盛の十七史商榷趙翼の二十二史箚記等僅に數部の書に於て之に關する議論を窺ふを得べきのみ。但し歴代の史籍に就きて一々研究せば更に大に得る處あるべしと雖も是到底僅々たる日子を以て成功し得る處にあらざるを以て余は先史通を取りて東洋に於ける歴史研究法研究の端緒を發せり。然るに從来未だ此種の研究を試みしものなきを以て容易に我意に滿足するの結果に到着する能はず。然れ共其意に滿つるをまたば大成の期知るべからず、故に敢て此未定稿を公にす。若し大方識者の叱正を受け以て東洋歴史研究法發達の眞相を明ならしむるを得ば余の幸何物か之に加へむ。[3]

田中が「過去の事実」以上に「研究方法」に興味を持っていたことは、これから明らかであるが、「漢学などをするやつはけしからん」と言われていた西洋一辺倒の当時の慶應義塾で、「対象としての中国史学」ではなく、「方法としての中国史学」に焦点をあてていたことは、二重の意味で彼の学問観の出発点を示していて興味深い。この論文は、西洋史学理論をもとに中国史学理論を新なる目で見直したものであり、おそらく『史通』について

論じたものとしては近代日本で初めてのものであろう。[4] この論文自体は、『史通』の紹介が中心であるが、『史通』分析の基礎になっているのは、ドロイゼン、ベルンハイム、ヘーゲル、フリーマン、シーレー、マコーレー、バーンズ等の西洋近代史学理論である。その論点は、西洋史学理論が展開してきたあらゆる問題—史料論、歴史の客観性、価値判断、因果性、歴史哲学等—を劉知幾はすでに論じており、史職の問題、史評の困難さ等についてまでも言及していて、比較史学理論的視点から見れば、『史通』には、そこから学び取るべき多くの宝が隠されているというものである。『史通』に代表される中国史学理論は、中国史の史実に則して議論が展開されているので、その論点を抽象化して論ずることは難しいが、田中は、これを初めて学問的議論の場に出したと言える。

一方、こういった検討を通して田中は、中国史学と西洋史学の相異なる根本的特質にも言及している。例えば、次に引用する一節は、中国と西洋における歴史学のあり方を論じたものであるが、昭和以降よく話題にのぼったテーマであることを考えると興味深い。[5]

> 李延壽の南北両史各八十卷は頭慶中の著述なるを以て當時に公にされしも知幾は「古今正史」の篇に於て一言も叙及せず或は其私撰たるを以ての故か。抑も仲尼尚書春秋を修めしをはじめ陸賈范曄等身史職にあらずして史書の撰述に従事せしものなきにあらずと雖も歴史の書多くは是勅令を奉じ帝室の保護を受けて初めて成りしものなり。是支那に於ては前代治亂興廢の跡を明ならしむる修史事業を以て重要なる政務の一となせばなり。飜て西洋の歴史を見よ。固より政府の保護を受けて成りしものなきにあらずと雖も多くは是私著なり。[6]

田中はこの歴史と政治の関係を展開して、「過去の歴史を以て現今の政治の参考に資せんとするは果して其當を得たりと云ふべきか」[7]という問題を提起する。これは、歴史研究の位置づけをめぐる十九世紀の大問題であったが、[8] 田中はヘーゲル流の消極論を廃して、ドイツ・イギリスの当時の積極論に組する。ドロイゼンの「歴史研

究は政治上の組織改善の基礎たり、經世家は實際の歴史家なり」とか、フリーマンの「歴史は過去の政治に過ぎずして、政治は現在の歴史に過ぎず」を引きつつ、田中は、政治史を中心とした歴史研究の重要性を主張し、これを広義の文化現象のひとつとしての「国家」研究として展開しようとしていたようである。[9] 田中自身、政治学者として多くの著作を残しているし、実際の政治にも深く関わっていたことを考えあわせると、興味深い。[10]

ともあれ、田中は史学研究法を単なる技法論だけにとどめず、歴史学の存在意義についての学問であると考えており、この点で、従来の史学理論とは趣を異にしているといえよう。この視点は、翌一九〇一（明治三十四）年に書かれた「王鳴盛の史學」において一層明確になる。これは、清朝考証学を歴史研究に応用した王鳴盛の『十七史商榷』を論じたものである。この本は、毛晋の刻した十七史の譌文を改め、脱文を補い典制事蹟を挙げそれに精密な考証をほどこしたものであるが、この王鳴盛の歴史考証学を田中は、ベルンハイム流の分類学で言う補助学の分野に対応させながら分析している。つまり金石学（Palaeography）、系譜学（Genealogy）、紀年学（Chronology）、等西洋史学で言う補助学に相当するものを王鳴盛は既に縦横無尽に駆使して史実考証を行っており、その批判的なこと、多くの卓見を含んでいることを指摘している。[11] また、田中は、その「序文」を引いて、王鳴盛の史学原理論を展開し、「史學研究の大眼目は卽ち實を得るにあり從て史籍を編述するものは記實を以て其大目的となさゞる可らず」として、これがまさに当時の「欧米新派の史家の主張」と全くその揆を一にしていると言う。つまり、ランケ流の「事実をして語らしむる」精神と同じではないかというわけである。[12]

中国と西洋の史学理論の比較研究を通して、より普遍的な近代歴史学のあり方を探る試みは田中に始まるといっても過言ではないであろう。盲目的な西洋史学崇拝に陥らず、中国史学の中に西洋史学にはないものを進んで見いだそうとした田中の姿勢は、当時の西洋一辺倒の風潮の中で、寧ろ後向きのように受け取られたであろうが、

今振り返ってみるに、むしろそこに田中の確固たる学問態度を見いだすことができる。

(1) 初版は、明治三十六年であるが、第二版（大正二年）の序で坪井は、「予の研究法は……要するに確實なる證據物件を收むるを以て研究の鍵鑰と爲す、其物體の精神的なると物質的なるとは敢て問ふ所にあらず、廣く索め博く收め審に調べ愼で選む、之を是れ史學の本務とす」と語っている。

(2) 内田は、歴史論という言葉を使っているが、これは、歴史哲学とも記述歴史とも異なり、「一般に種々なる史的事實に就きて、其の普通なる性質及形式を究め、之に貫通する理數を明にするを以て、其の目的とすべきものであります」（「歴史の理論と歴史の哲学」、内田銀蔵『史學理論』（同文館、大正十一年）所収、四三－四四ページ）としている。つまり、ここで言う歴史理論とは、歴史記述の概念枠組のことであって、内田は民族経歴論、国民経歴論、社会団集経歴論、氏族経歴論、個人経歴論の五つを掲げている。内田の目指したのは田中とは異なる方向であったが、彼独自の歴史記述の枠組を提唱していることは注目すべきである。

(3) 『田中萃一郎史學論文集』所収、三四七－三四八ページ。初出は『慶應義塾學報』第三十号（明治三十三年）。

(4) 史通研究史上における田中の位置については、増井経夫『史通—唐代の歴史観』（吉川弘文館、昭和四十一年）、三九ページ参照。

(5) 例えば、村川堅太郎「ヘロドトスについて」『西洋史学』第六号（昭和二十五年）、二－二三ページ参照。

(6) 『田中萃一郎史學論文集』、三六八－三六九ページ。

(7) 前掲論文集、三六九ページ。

(8) Deborah Wormell, *Sir John Seeley & the Uses of History*, (Cambridge, 1980) に詳しい。

(9) 「國家の生物學的觀察」『田中萃一郎史學論文集』所収、六一九－六三四ページ。初出は『三田學会雜誌』第十巻第四号（大正六年）。

(10) 占部百太郎「田中博士の追憶」『實業』第三巻第三号（大正十二年）、六一－六二ページ参照。

(11) 『田中萃一郎史學論文集』所収、三九四－四〇三ページ。初出は『慶應義塾學報』第四十六号（明治三十四年）。

(12) 前掲論文集、四〇一ページ。

三

これから四年後の一九〇五（明治三十八）年、田中はイギリス・ドイツに二年間の留学をする。イギリスでは主

としてロンドンの大英博物館で東洋関係の史料収集を行い、ドイツではライプチッヒ大学のK・ランプレヒトのもとで歴史学を修めた。

ランプレヒトの立場は、ランケを中心とする政治史中心の歴史学、つまり個人心理学による歴史の説明に反対し、歴史研究は社会心理学的、集団心理学的手法によって行われるべきだ、と言うものであった。Wie ist es eigentlich gewesen? と言うランケ流の政治史にたいして、ランプレヒトは、Wie ist es eigentlich geworden? を知るのが歴史であるとし、これを文明史 (Kulturgeschichte) と名付けた。(1)

ドイツの歴史学界では、ランプレヒトの『ドイツ史』(*Deutsche Geschichte*, 12 Bde. 1861-1913.) をめぐって論争が行われていたが、当時にしては、三十二才という、比較的年とってから留学したことが幸いしたのか、田中はこの論争に翻弄されることはなかったようである。つまり、田中は、政治史に対立するものとしての文化史という、当時一般的であった受け取り方をしていない。田中は次のように語る。

> 従来の研究餘りに政治史的なりしにより之に對して文明史の撰述せられしことは自然の結果なりと雖も而も文明史と雖も決して政治上の現象を措て問はざるにあらず、政治史と雖も又決して文物に干する記述を避けしにあらざることは従来に於ても然り、一方に於てはラムプレヒトの獨逸史は敢て文明史と題せざりしにあらずやとて、文明史の獨立を否定せんとすれば他方に於てはランケの歴史は即ち文明史なりと説く、要するに文明史と政治史との相違は單にその叙述の大綱を何れに求むるやと云ふに止まり、敢て枘鑿相容れざるものなりと云ふにあらず、彼此の間に試みられたる論戰は畢竟するに、互ひに他に對して雅量を示さざりしが爲に起りしことと見る可し。(2)

ともあれ田中は、ランプレヒトの考えに共鳴したようで、彼を通して歴史研究の知的ダイナミズムを主唱したアンリ・ベル (Henri Berr) の主宰する『歴史的総合雑誌』(Revue de synthèse historique) に関心を寄せるように

なる。この雑誌は一九〇〇（明治三十三）年にパリで創刊されたもので、ルシアン・フェーブル、マルク・ブロックに代表されるフランス史学の出発点となった運動であった。当時の歴史学が史料分析を専らとし、自らの位置づけを欠いていたことへの反省から、また、歴史家が忘れていた哲学的総合という問題に取り組んでいたデュルケームに代表される社会学の目ざましい台頭ぶりに刺激されて、人間科学としての歴史学の復権を求めて企画された雑誌であった。[3] 当時ドイツで一人孤高を保っていたランプレヒトやイタリアのクローチェの参加も得たこの雑誌は、「新しい歴史研究」運動の中心となっており、田中に歴史を研究すると同時に歴史研究とは何かを考えることの重要さを再認識させてくれたようである。[4]

（1）J. W. Thompson, *A History of Historical Writing*, (N. Y., 1942), Vol. II, pp. 422-428. 参照。

（2）「史學研究法講義」ノート、五一ページ。

（3）詳細は、竹岡敬温『「アナール」学派と社会史』（同文館、平成二年）参照。

（4）拙稿「脱亜論と歴史研究」、三一ページ参照。尚、「史學研究法」講義ノートと共に残されていた、田中の手写による G. Monod et G. Fagniez, "Du progrès des études historiques en France depuis le XVIe siècle," *Revue Historique*, 1-1, (1876) pp. 5-38. は、田中の構想する歴史研究の方向を示唆していて興味深い。なぜなら、この論文こそ、*Revue Historique* の創刊号巻頭を飾った、今日のフランスの歴史学の方向を示した記念すべき論文であったからである。

四

一九〇七（明治四十）年春、二年間にわたる留学から帰国した田中は、慶應義塾大学部で歴史を担当し、一九一〇（明治四十三）年には自ら中心となって大学文科に史学科を開設した。「史學研究法」の講義を開始したのもこ

の年であった。[1] これから紹介する田中の講義ノートはA五判のノート約五百ページにのぼる手稿である。講義の骨子が一応の完成をみたのは恐らく一九一六（大正五）年頃であろう。[2] この六年間で田中の史学概論の大体の構成は終わり、その後も筆を入れながら、「史學研究法」は、大正十二年夏の突然の死に至るまでその体裁を整えていったと思われる。

ここではとりあえず、「史學研究法」講義ノートの目次を紹介しておこう。この目次は、（一）現存する講義ノート、（二）田中の死後間もなく全集が企画された際に作成された目次、（三）現存する講義ノートの冒頭にある目次、をもとに作成したものである。第二編の構成は主として（三）に基づいている。第三編解釈学は（三）のみにより、本文は現存の講義ノートにはない。目次から伺える通りこの第三編は、歴史哲学を論じたものであろう。これと同種の主題は「史学の性質及びその任務」[3]と題する論文の中でも展開されているが、そこでは様々の歴史論、歴史の哲学的解釈の紹介が主であるので、本稿の主たる考察の対象とはしない。

田中萃一郎「史學研究法」講義ノート

第一編　史學序論

第一章　（歴史と史と史學てふ熟字につきて）（亡失）＊

第二章　東亜史學史

第三章　西洋史學史

第一節　希臘・羅馬に於ける史學の沿革

第二節　近代歐洲就中獨逸に於ける史學の沿革
第四章　歴史の種類
第五章　參考學科
第一節　地理學含歴史地理
第二節　心理學
第三節　社會學
第四節　統計學
第五節　政治學
第六節　經濟學
第七節　法律學
第八節　神學・宗教史
第九節　言語學并に文學
第十節　藝術并に科學
第十一節　哲學
第六章　字學
第七章　文書學
第八章　紀年學
第九章　印章學

第十章　系譜學・紋章學・古泉學・度量衡學
第十一章　目録之學
第十二章　史料の種類
第一節　直接の觀察記憶
第二節　報告・傳説
第三節　遺物
第二編　考證原理
第一章　緒言
第二章　史料の批判
第一節　批判
第二節　史料作成の時と處との確認
第三節　作者記者の確定
第四節　原本なりや否やの確定
第五節　史料の校訂・出版
第六節　史料の確認
第七節　史料相互の比較
第八節　事實の整頓

第三章　史實の說明
第四章　史實の綜合的觀察
　第一節　事實の聯絡
　第二節　史實の復活
　第三節　心理的要素の觀察
　第四節　自然的（物質的）要素の觀察
　第五節　文化的要素の觀察

第三編　解釋學（亡失）
第一章　因果の概念（亡失）
第二章　必然と偶然の概念（亡失）
第三章　發展と進歩の概念（亡失）
第四章　心理的原因（亡失）
第五章　心理的單位（亡失）
第六章　歷史の價値（亡失）

＊「史學の性質及び任務」の緒言に同主旨の議論がある。

(1)『慶應義塾百年史』別巻（大学編）（昭和三十七年）、四四－四五ページ。

(2) 本講義ノートの第二章「東亜史學史」の行間及び別紙に章学誠への言及があり、田中の手沢本である『文史通義』の末葉に「大五、正月、閲了、金嶺識」とあることから、推測したものである。金嶺とは、田中の号である。

(3) 『田中萃一郎史學論文集』所収、四七七－五四七ページ。初出は『慶應義塾講演集』(慶應義塾出版局、大正二年)。

五

目次からも伺える通り、この史学概論は、当時のヨーロッパの史学概論、特にベルンハイム流の史学概論に基本的に則ったものであり、同時期の坪井九馬三の『史學研究法』の構成ともよく似通っている。しかし、史学概論に対する田中の基本的立場が彼らと大きく異なっているのは、前にも述べたように、ベルンハイム或は坪井のそれが、歴史研究の手引として書かれたものであるのに対して、田中のそれは、史学概論を「歴史学とは何か」を考える学問とみなしていることである。田中は歴史研究の理論的・歴史的・社会的考察と、考証としての史料批判学、それと歴史原理論の三つからその史学概論を構想している。

史学序論と題した第一編は、現存する本講義ノートの中でもっとも重要な部分である。

第一章は、講義ノートが存在しないが、大正二年の『慶應義塾講演集』に掲載されている「史學の性質及びその任務」の緒言の部分に相当すると考えられる。(1) ここで田中は、史学・歴史という言葉の概念を歴史的に検討し、西洋史学の導入以後は、歴史という言葉が客観的な意味の歴史と主観的な意味での歴史という二つの意味で使われるようになった、つまり、ヒストリーの訳語として歴史が使われるようになったことに留意すべきだとしている。(2)

第二章及び第三章は、ふたつの意味で注目すべき章である。第一に史学史を史学概論の冒頭に据えていること。これは、現在に至るも史学概論の体裁としては殆ど見られない。第二に東亜史学史として中国、朝鮮、日本にお

ける歴史学の歴史から始めていることである。明治以降の史学概論書は、自らの歴史研究の手本を西洋の歴史学に求めているためか、中国・朝鮮・日本の史学史を射程内におくことは殆ど無かった。東亜史学史の冒頭で田中は次の様に語る。

> 人あり若し西歐の文明は進歩發展せりと雖も東亜の文明は然らずと云ふものあらば、之れ誤れるの甚だしきものなり、その進歩の遲々たることは夫れ或はそれあらん、而も毫も發展の形跡なきにあらず、今東亜史學の沿革を繹ぬるに方りて余輩は益々輕率なる東西文明比較論の不當なるを覚えずんばあらず。(3)

西洋史学の受容は、自らの歴史研究の伝統を基盤にして初めて可能であり、その基盤を自らが意識することが必要であるという点で、東アジアにおける歴史研究の歴史から史学概論を始める田中の姿勢は、注目すべきである。

史学史の記述において、史学批評にページを割いていることも注目すべきである。中でも劉知幾と章学誠について田中は次のように語る。

> 章學誠（一八〇一年卒）の文史通義に至りて世人或は以て劉知幾史通の上にありと爲せり。余輩を以て之を見れば、文史通義の特色は史通の史籍の分類を排斥せしと、全篇の趣旨の分析的ならずして綜合的なるにあり、或は目して考證派に對する反動的一分派と爲す可きか。(4)

後世、劉知幾と章学誠の比較論は現在に至るまで数多くあるが、章学誠の発見者でもある内藤湖南の見解に代表されるように、そのほとんどが、章学誠を高く評価しているのを見ると、田中の判断には興味をひかれる。つまり、田中は、「綜合的」とか「考證派に對する反動的一分派」という表現で、章学誠は、劉知幾が歴史とは何かという問題を史学理論の場で議論しようとしたのに対し、それを歴史哲学の場に引きずり込んでしまった、と

いうことを指摘している。(5)

田中の基本的態度には、史学理論と歴史哲学を「似而非」なるものとする考えがあり、これが劉知幾を高く評価する拠り所となっている。

史学史が歴史学を時間軸で位置づけたとすれば、それに続く第四章から第十一章はそれを空間軸で位置づけようとしたものといえよう。第四章歴史の種類では、宇内史と世界史の区別、文明史と政治史の関係、時代区分等について論じており、興味ある議論を展開している。例えば、時代区分というものは、本来連続的であるものに、非連続という観念的操作を加える歴史認識的行為であるという前提のもとに、これは便宜上随時に定めてよいもので、フランスの歴史家は一八七一年以来をもって最近世史とするのに対して、日本人の見地からすれば、これを一八九四・五年以来とすることも出来るとしている点は興味深い。

第五章参考学科は、いわゆる歴史の関連分野の紹介である。地理学では、チェンバレンやバチェラーのアイヌ研究をもとに地名語源学を紹介し、心理学では当時新しい分野であった社会心理学に力を入れ、政治学は国家を研究対象とする故に歴史学とは特に密接な関係を有するとし、経済学についてはスミス、マルクス等の学説を紹介している。第六章字学は中国の小学類について詳述し、中国の字学及び金石文の歴史、日本・朝鮮・ヨーロッパの金石文にまで言及している。第七章文書学はヨーロッパでの文書史料批判の歴史を中心に日本での史料批判をも含めてそれらの詳細な歴史を語っている。第八章の紀年学は、世界の様々な暦学を紹介し、紀年そのものの歴史学における有用性についてアッシリア学と中国古代史での日蝕による日時決定について紹介しているのは、坪井九馬三の『史學研究法』を想起させる。このように田中の視点は、決して西洋史学にとどまらず、中国史学において西洋より進んでいる分野は、それを史学概論の中に位置づけている。この好例は、第十一章の目録之学

である。

史学概論で目録学に一章を割くことは、田中を含めた当時の日本の歴史家が手本としたE. Bernheimの*Lehrbuch der Historischen Methode* (Leipzig, 1889) 及び*Einleitung in die Geschichtswissenschaft* (Berlin. 1905) にもみられない章である。田中がこれを歴史の補助学中第一位を占めるものとして最も力を入れているのは、清の乾隆帝のときに編纂された『四庫全書総目提要』に代表される東アジアの歴史研究の貴重な資産を無視できなかったからであろう。目録学は、「先人の研究何れの程度に進みたるやを明にせずんば貴重の光陰を徒費するの虞あるが故に、目録之學の進歩するとせざるとは史學の研究者に取りて至大の関係を有せり」[6]と田中は説く。目録学は、中国の書籍分類では、歴史学の一部になっており、歴史研究の範囲・対象をどの様にとらえるかといった歴史認識の構図を教えてくれるものである。中国・日本・朝鮮の目録学の歴史的説明に多くのページを費やしているのは、歴史という、対象領域の設定しにくい学問の全体像を目録学は教えてくれるのだ、という考えが田中の脳裏にあったのではないだろうか。

この講義ノートの第一編第十二章より第二編第四章までは、E. Bernheimの*Einleitung in die Geschichtswissenschaft* (Berlin. 1905) の、かなり忠実な翻訳、紹介である。『歴史とは何ぞや』と題された、坂口昂・小野鉄二による本書の日本語訳の出版は、大正十二年であるから、ベルンハイムの史学方法論の紹介としてはかなり初期のものであるといえよう。[7] この部分は、ベルンハイムの第三章第二節から第五節に相当するもので、目次からも分かる通り、純粋に技法論的な部分である。

この部分の概要は次のようである。まず、歴史研究は、史料を集め、整理することに始まる。この史料には様々なものがあり、大別して直接の観察記録、報告・伝説、遺物の三つである。史料はまず、その真偽を弁別する

ために史料批判を行う。この批判は、史料のつくられた日時とか、どの程度まで真偽かといったことを検討する外形批判と、内容の価値を定めて証拠としての力を明らかにし、これを対照して評価するという内容批判とに分かれる。つぎに確定された史料を解釈して史実を決定し、これを全体の中で構成・叙述することで、歴史研究は完成する。

田中がこの系統的に整備されたベルンハイムの歴史実証技法に多くのページを割いて、講義で紹介しているのは、ここに近代ドイツ実証主義史学の成果のエッセンスがあり、歴史研究を志す者にとってこのうえなく役に立つものであるとの認識があったからではないか。

(1) 「史學の性質及びその任務」は、一緒言、二東洋の史學、三西洋の史學、四結論、からなり、二及び三の内容は、講義ノートの第一編第二章・第三章と殆ど同じであることから、第一章は、この論文の緒言の内容と同じであろうと推察した。

(2) この詳細に関しては、拙稿「『歴史』・その言葉と概念の変遷」東大由良ゼミ（編）『文化のモザイク』（緑書房、一九八九年）、二二七－二三八ページ。

(3) 「史學研究法講義」ノート、一ページ。

(4) 前掲ノート、七ページ。

(5) 増井経夫『アジアの歴史と歴史家』（吉川弘文館、昭和四十一年）は、章学誠に対する田中と同主旨の見解をより明確に表明している。尚拙稿「歴史学における認識されたものの認識について（二）」『山梨大学教育学部研究報告』第三十一号（昭和五十五年）参照。

(6) 前掲ノート、一三八ページ。

(7) 生前、松本信廣先生から伺ったところでは、田中萃一郎は、昼休みに史学科の学生を集めて、ベルンハイムの *Einleitung* の講読を行っていたそうである。

田中の史学研究法がベルンハイムに多くを負っていることは疑いないが、では田中はそれで満足していたのだろうか。第二編考証原理の緒言で田中は次のように語る。

六

抑も科學の研究方法に二種あり、歸納法演繹法即ちこれにして自然科學は何れも歸納的研究方法に由る可きものなるが、論理學并に数學の如きは演繹的科學なり、扨、史學の研究方法は如何と云ふに、先づ第一に史料に就きて歸納的研究を試みて史實を確め、次に第二に経驗に基ける想像を用いて之を解釋せざる可からず。第一段の研究法は客觀的なるも第二段の研究法は主觀的なり、而して想像を用いて解釋することは即ち哲學的前提を以て演繹的推論を試むことなるも、而も比論の範圍を脱すること能はざるもの多し、但し、かくの如くにして確定せられたる史實を蒐集して更に歸納的推論を試み、以て法則を確立して綜合的に史學を科學たらしめんとするはこの第二段の研究法を擴充せるものにて、要するに考証の範圍を脱逸せるものなり。(1)

ベルンハイムの『歴史とは何ぞや』の主眼は、史料操作の技法論であり、史実の説明、史実の総合的観察は最後にそれと関連させてふれているにすぎない。田中が、この引用に見られるように、繰り返し史料批判の次にくる問題に言及しているのは、まさにベルンハイムに代表されるドイツ実証史学の限界に気付いていたことに他ならない。これについては、既に C. V. Langlois & C. Seignobos, *Introduction aux études historiques* (Paris, 1898) で指摘されていたことであるが、(2) 田中はこれを彼らに求めたり、頼ったりはしなかった。

この問題の解決として、田中は二つの手がかりを残してくれている。まず「Emil Reich 氏の史學研究法」(3) と題するハンガリーの歴史家を扱った論文の中で田中は、歴史研究は、過去の社会において人間が働き、また考え

た結果のあらわれたものを研究する学問であると一般に考えられているが、ただ制度・事件そのものの存否を研究するだけでは、正確な史実を叙述するだけでは不十分で、その史実の意義を明らかにすることが肝要であるとし、これを行うには想像の力を借りねばならぬとした。「事實は骸骨に過ぎぬ、之に生命を與へ之が意義を明にするには想像を要する」[4]と田中はいう。どれほど材料を集め、記録を渉猟しても、それを解釈し説明するのでなければ、それは歴史学といえない。ベルリン派の歴史学のように史料の言語学的研究を以て能事了れりとするのではなく、歴史学は総合的研究、特に心理学に重点を置いた研究にまで至らなければならない、と考えていた。田中はこれを「ホメロスの史的復活」と「リコルゴスの歴史的存在に関する研究」という二つの論文[5]の中で展開する。前者では、言語学的研究の厳正批判で史的価値を失っていたホーマーの二大叙事詩が、当時「史的復活」を行った次第を述べ、歴史考証の慎重でなければならぬことを説き、後者では、当時までの歴史研究法が十六世紀から十九世紀にかけてのヨーロッパの刑事裁判で用いられた訊問法、つまり一人の人物が判事と陪審官と検事と弁護士を一身に兼ねていた状況と同じで、これでは歴史学は到底実際の真相、即ち事件の心理的真理を発見できるものではないことを説いたものである。

つぎに田中はこれを「詩話」という中国史学の歴史叙述形式に求めた。彼は「支那學研究法上の一特色」[6]と題する論文の中で、清朝一代の学術・文芸・朝儀制度・有職故実に言及したいわば清朝の文化史とでもいうべき、清朝末期の学者楊鍾義の『雪橋詩話』(一九一三年)を取り上げ、特に「詩話」という歴史の叙述形式に焦点をあてて、中国において詩によって一代の故実を伝えようとすることの歴史を説き、それの持つ重要性に言及している。田中は、この詩話という歴史の叙述形式はディレッタント的だとか、アマチュア的だとか言われ、あたかも欠点であるかのように簡単に片付けられてきたが、決してそんな単純なものではない、むしろそこには「修史學

Historiography の上に於て人をして啓發せしむるものがある」[7]とする。

抑も史學は科學なりや否やと云ふ問題は數ば繰返して論ぜられたが、論理學としては史學の研究方法はかくあらねばならぬと斷定し難く史學の大家が如何なる研究方法を取れるやを論述するに過ぎぬのである。それで史學が自然科學と性質を異にしつつ而も科學なりと稱するを見てミルやフアウラアの如き英國の論理學者は史學研究の際に於ける科學的要素は比較研究にありとし、かくて英國の論理學では歴史的研究法と比較的研究法とを同一視するに至り、之に反して獨逸の論理學者は史學を以て自然科學と異れる一の新科學なりと説明し、ヴィンデルバントは之を以て法則的 nomothetisch 科學に對して事件的 idiographisch 科學と稱し、リツカアトは之を人文科學と呼ぶに至つた。併し飜て思ふに史學の研究には勿論分析も必要であるが之と同時に綜合も亦之を缺くことは出來ぬ。而して自然科學の研究は分析を主とするが哲學は之に反して綜合的に世界觀人生觀を立つることを以てその本分として居る。して見れば史學の研究法は哲學的であらねばならぬ。自然科學では無いが科學中に最高の位置を占むる哲學の研究方法をも採用せねばならぬ。[8]

として、ウアバンの『価値論』を引きつつ、歴史学の中でも歴史叙述の鑑賞的記述であって科学的記述とは異なる部分がある、つまり、「價値の絶對的理想的標準に照して研究の結果として得たる史實に對し賢愚善惡美醜の批判を下すものである。」[9]とし、劉知幾の史有三長説を次のように解釈する。

昔劉知幾は史有三長、才學識、世罕兼之と云ふたが、史才とは文藝の天才として史筆を具ふるを云ひ史學とは分析的考證に長けたるを指し史識とは綜合的哲理を解せるものと見る可きである。張采田も文章謂之才、考訂謂之學、義理謂之識と云ふて居る。果して然りとせば敢て總ての學問とは云はぬが少くも史學の上に於ては科學的研究の結果を韻語にて表現せんとする支那學問研究法上の一特色に就て三度思を致すの必要がある。[10]

田中は歴史研究の最終目標を叙述に置き、それによって、近代実証主義史学をもう一歩踏み込んで展開しようと模索していたのではないか。

(1) 前掲ノート、二四七－二八四ページ。
(2) 本書の日本語訳は、『ラングロワ及セーニョーボー氏　歴史研究法綱要』と題して、村川堅固・石沢発身の訳で、一九〇〇－〇一年に東京専門学校出版部からその抄訳が出版されている。
(3) 『田中萃一郎史學論文集』所収、二七三－三四六ページ。初出は『三田學会雑誌』第一巻第一号－第三号（明治四十二年）。
(4) 前掲論文集、三三六ページ。
(5) 「ホメロスの史的復活」は『日本及日本人』第六百九十六号（大正六年）所収。「リコルゴスの歴史的存在に關する研究」は未公刊論文。
(6) 『田中萃一郎史學論文集』所収、一〇一－一二五ページ。初出は『東亜經濟研究』第五巻第一号（大正十年）。田中のこの論文に関して、神田喜一郎は「『内藤先生とシナ古代史の研究』三題」『内藤湖南全集月報4』（昭和四十四年）の中で、次のような話を紹介している。今の歴史学者は細かい事実の考証ばかりに終始して、少しも自分の史観というものを持たない識見の貧困に対する不満を松本彦次郎と内藤湖南が語り合った後で、「そのためか、ちょうどそのころ発刊されたばかりの慶應義塾大学の『史学』に話題が移ると、今度は打って変わって、松本さんはその清新な学風を盛んに推賞された。内藤先生も、それに同調され、特に田中萃一郎博士の識見をほめられた。そうしてわたくしに向かって、田中博士がその前年であったか山口高商の雑誌に書かれた「雪橋詩話を読む」という論文を一度見てみよ、あれくらいシナの学問に理解のある学者は専門学者にも珍しい、という風なことをいわれた。」
(7) 前掲論文集、一二三ページ。
(8) 前掲論文集、一二三－一二四ページ。
(9) 前掲論文集、一二四ページ。
(10) 前掲論文集、一二四－一二五ページ。

七

一九一〇（明治四十三）年六月十八日開催された三田史学会発会記念講演で、田中は、「慶應義塾と史學の研究」と題する開会講演を行い、明治初期の慶應義塾の学問傾向は、西洋学一本槍で、漢学は感情的なまでに排斥されていたが、明治十七年より、漢学が予科の教授課目に入ってきたことを述べたあとで、次のように語る。

ヘーゲルの辯証法の術語で云へば、皇漢學の論斷に對する反斷として慶應義塾の洋學が起ったのであって、漢學は一時は全く排斥せられたが、併し軈て論斷と反斷とを總合して一方に偏せぬ眞の學問を樹つるの必要から夙に漢籍が再び講ぜらるることとなったのである。……

明治三十七、八年戦役の結果歐米に於ける日本に對するの興味は決して武士道の研究にのみ止まるのではない。隨て我邦は勿論廣く東亜の文物の研究は日本の學者の双肩に掛かって来たのである。皇漢學の復興と云ふと不快に思ふ人もあろうが、西洋の文物に併せて東亜の方面をも比較的に研究せぬ時は、自國の文明の世界史上の位地を了解することは出来ぬ。隨て眞の學問をしたものと云ふことは出来ぬ。慶應義塾創立當時は洋學に重きを置いた。又今日でも重きを置かねばならぬが、眞に自我を解し自國を解するにあらずんば教育ある人物と云ふことは出来ぬ。而して自國を解せんとせば、國史に通暁し、且東亜の歴史を渉猟せねばならぬ。史學科は科學としての史學を興さんとするの大抱負を有すると共に、又その方面の研究を努めて眞に自國を解せんとするの人物を養成せんと期するのである。(1)

日本が世界の歴史学の中でどのような役割を担うべきかを考え続けてきた田中は、メタ・ヒストリーの研究に携わる限り、西洋史とか東洋史といった素朴な分類法に囚われることを潔しとせず、ヨーロッパと中国という二大文化の総合の上に日本の歴史学は築かれるべきであり、そこにより普遍的な歴史学が生まれると云う確信を抱き続けてきた。これが彼の史学概論の特徴である。(2)

西洋史学史を振り返ってみると、歴史研究自体は古いものであるが、例えば、イギリスの場合、歴史が大学で独立の講座になったのは、十八世紀に入ってからであり、ケンブリッジで歴史のトライポスが設けられたのは一八七三年であった。イギリスに限らず、ヨーロッパではこの時期に歴史研究が好事家的なものから学問的性格を帯びたものに育ってきたといえる。(3) 明治日本の大学に設けられた史学科が受け入れたのは、まだ誕生してまもない西洋近代史学であった。しかも、日本における西洋近代史学の受容は、伝統的中国史学をもとに作り上げた、

近世日本史学という西洋の近代史学に比肩しうる歴史研究の伝統があったからこそ、可能であった。このことを考え合わせると、史学概論に求められていたのは、単なる史料操作の方法ではなく、歴史学の存在意義とその体系の構築ではなかったのか。そしてこれに答えようとしたのが、田中の史学概論ではなかったのだろうか。

ヨーロッパの歴史学の単なる紹介ではなく、中国史学の理論をも加えた、より普遍的な近代史学のあり方を探ること、まだ体系的に完備されていない歴史学を原理論的に位置づけること、これが田中の目指した「史学概論」であったと言えよう。五十一才にして突如倒れた田中は、これを完成させることは出来なかったが、彼の目指した史学概論は世界の史学理論史の中でも特筆に値する。[4] 郷里にある田中の墓碑には、このような田中の学問観を象徴するかのような句が刻まれている。[5]

學總東西　把今古稽
不攀丹梯　桃李成蹊
澹忘筌蹄　操觚如猊
高與岳齊　餘采吐霓

(1) 「慶應義塾と史学の研究」『史學』第四十八巻第一号（昭和五十二年）、四ページ及び一一－一二ページ。

(2) ここで言及しておきたいのは、田中のような姿勢は、当時の歴史家には殆ど見受けられなかったということである。当時の日本では、ヨーロッパ史学を基礎に、新たな近代史学を作り上げるべきだ、というのが主流であった。例えば、田中と同世代の東洋史家桑原隲藏は、梁啓超の『中國歴史研究法』の書評の中で次のように述べている。「支那の史論家、例へば唐の劉知幾、南宋の鄭樵、清の章學誠等の主張の中には、勿論幾分參考の價値無いではないが、大體から見渡して、囚はれた議論が多い。支那の史學を發達せしむる爲には、過去の因襲から離脱することが必要であり、過去の因襲から離脱する爲には、司馬遷、班固等の著書や、劉知幾、章學誠等の批判から超越することが

第一義であらねばならぬ。之が吾が輩年來の主張である。今梁啓超氏が歐米の史學研究法に本づき、中國の史學の革新の急務を提唱し、『中國歴史研究法』を公にしたことは、實に吾が輩の所見に一致するもので、吾が輩は自身一個の爲に滿足を表するのみならず、廣く支那學界の爲に祝福したい。」「梁啓超氏の『中國歴史研究法』を讀む」『桑原隲藏全集』第二巻(岩波書店、一九六八年)、四六八-四七九ページ。初出は『支那學』第二巻第十二号(大正十一年)。

(3) J. McLachlan, "The Origin and Early Development of the Cambridge Historical Tripos," *Cambridge Historical Review*, 1947-49, p. 79.

(4) この点に関しての詳細は、拙稿 "Historiographical Encounters: The Chinese and Western Traditions in Turn-of-the-Century Japan." *Storia della Storiografia*, No. 19 (1991) を参照。

(5) 漢学者國府種徳(犀東)の撰である。